

教祖九十年祭を迎えるに当たり、思うところを述べて、三年千日の門出の心定めに資したい。

教祖は、月日のやしろとして親神の思召を伝え、たすけ一條のため、みずから艱難苦勞の中を喜び勇んで通り抜け、万人たすかるひながたを示された。しかも、子供の成人を急き込む上から、定命を二十五年縮めて現身をかくされ、今なお存命のまま、日夜、世界たすけのために働き下されている。この親心に応え、喜びに溢れてひながたを実践し、たすけ一條に励んで成人の実を挙げ、教祖にお喜びいただくことこそ、年祭を迎える道の子供の願いである。

教祖は、たすけ一條の道として、つとめを教えられた。

にち／＼にはやくつとめをせきこめよ

いかなるなんもみなのがれるで

とようふなむつかしくなるやまいでも

つとめ一ぢよてみなたすかるで

つとめは、人間世界創造の奇しき守護を、よろづたすけの上にお見せいただく、根本の道である。教祖五十年の道すがらは、このつとめの急き込みにほかならない。教祖先祭の元一日もまた、ここに由来する。仰せ通りのつとめをするという一事に、幾多の苦心が払われて来た道の歴史に照らす時、有難い今日の道である。感謝の真心を捧げつつ、一手一つ、つとめに徹する姿を以て、親心に応え奉らねばならない。

思えば、教会の初まりは、つとめ一條の実現を心に定めて、許されたものである。ぢばの理をうけて、真剣なつとめに、勇み心の真実を捧げ、陽気世界実現の守護を祈念するのが、教会の使命である。かくてこそ、たすけの理をいただいて名称の理は発揚され、教会内容はおのずと充実に来る。心定めを果たすという一点に心を尽し、仕切つてその達成を志すのが時句の急務である。鳴物なりと出しかけよ、とのお言葉を押し、道具の完備を急いで来たが、人を寄せ手を揃えることは、つとめ完成の上になくことのできぬ要であり、教祖の終始心をおかけ下されたところである。教祖は、さづけを渡しよふぶくを育てて、人々の成人を促しつつ、つとめの模様立てを進められた。

これからハいたみなやみもてきものも

いきてをどりでみなたすけるで

さづけの理は、今広く我々にも許されている。しかも、親神は、常に先回りしてお待ち下されている。ひたすら、親に凭れて足を運び、真心こめて理を取り次ぐ時、不思議なたすけをお見せ下される。まことに心強い限りである。よふぼくたるものは、このことを心に刻み、挙つてさづけの取り次ぎに勇み、おかけいただく大なる期待に応え奉らんことを切望する。さづけを取り次ぎ、たすけ一條に励む時、心のほこりはおのずから払われて、陽気づくめの心と入れ替わり、人の心は成人する。成人は、理の御用を通してこそ、果たされる。

成人とは、日々々々、親の思いに近づくことである。それは、不断の着実な歩みの中から、旬に芽生え実を結ぶ。教祖の年祭を旬として、心のふしんを形のふしんに託し、仕切つて成人を願つて来たのも、この故にほかならない。おやさどふしんは、教祖の御理想を体して、誓つて勇躍した心のふしんであり、父祖の信仰と切なる願いがこめられている。これを継承して、倍する努力を続けることが、心の成人をお見せいただく道であり、ひいては、その真実は、縦の伝道をも招来する。

みかぐらうたに、

九ツ こ々までついでこい

十ド とりめがさだまりた

と教えられる。とりめが定まるとは、まさに、末代続く陽気ぐらしの世界である。その守護は、ここまでついで来い、と手引かれる親神の導きに、心を定めてついで行く時いただける。成つて来る理に耳をすまし、教祖の面影を求めて身近に教祖を押し、三年千日、ひながたの道を明るく歩み抜かせていただきたい。

世界は、我が身思案に流れて扶け合う喜びを忘れ、苦惱と混乱にあえいでいる。一日早く親神の慈愛に導かれたお互いは、その喜びを深く味わい、たすけ一條の実践を以て、たすける理がたすかる、天の理を人々に伝え、

せかいぢういちれつわみなきよたいや

たにんとゆうわさらないぞや

とのお言葉通り、世界の兄弟が互いに睦み合う、陽気ぐらしの世の様をお見せいただけるよう、年祭活動の第一歩を踏み出すに当たり、決意を新たにすることである。

ここに信念を披歴して、全教の奮起を促し、親神の守護、教祖の導きを願ひ奉る。

昭和四十八年一月二十六日

真柱 中山 善衛